

力士十人と玄關の左右の陰に伏せり。當日ふまねが山口父子。斯  
事とも知らざりて。尋常の装束なり。本城に投来り。玄關に當  
りて。奏者の侍出迎へ。今日主君の命あり。まづ左馬助に對面せ  
られ。然して後九郎次郎に。見事せんとの評説あり。君の評説  
案内せんと。左馬助と伴ふ。静に岡麿とくち通る。猶奥深く  
進みゆくと。九郎次郎に斯と知らねど。何とやら胸うち謀ぎ心得  
がく思ひゆく。父も恥と目注せり。左馬助も怪しやと思へば一足  
踏止しが。這より返まきまもあらねど。氣配りく同毎くと。瞬も  
せで歩行。對面の廳の隔亮と。用や否や。左の陰より戸部新十郎  
跳出聲もけむ。無忌とくむ。左馬助も心得て。振脱んとあせり。も  
大力の戸部も抱止られ。刀と掣ぎ腕も出む。怪とるがう大音あび。

孰者なれば左馬助に。斯る無礼とあつるを。詞辯と語れと喚ぶ  
ふ。新十郎に嘲笑ひ。汝が輩のちもむきん。聽て君より沙汰あらふ。  
其响詳ふ承听と。汝と捕ふる乃郎に。戸部新十郎門が嫡子  
新十郎あり。左馬助這ふ来らば。活捉べしとの評説と奉汝と斯  
に捉得たり。尋常も繩と承と。一喝発して粹胡まを。左馬助も  
さこのちる勇士。新十郎と異ともせ代。要時かやぐら扱合し。新  
十郎へ父の仇あり。増て主君の命あり。倣損ともせ存生あるも。面  
目あらと念誥。齊力かきり扱ひたり。命惜しで擇く所見。鐵  
虎銅龍鬪して。裂谷崩嶺もるがう。斯る處へ朝比奈備中  
守頭出。大音声も罵て謂り。呼よ左馬助。逢ひねる。奉止まらぬ。  
是主君の設意あり。かごとく争えんより。勇士らへ細められしと